

希求

加茂 義光(かも よしみつ) 63才

コロナ禍で日常生活が大きく変わり、生命が危機に晒(さら)された日々を振り返って、改めて生命の尊さを見つめる機会になった。父から聞き取ったことを中心に書いてみたい。

父は1925年(大正14年)生まれ。1943年(昭和18年)に志願兵として18歳で召集され静岡連隊から出兵し、旧満州、沖縄、石垣島と転戦した。石垣島では飛行場造りの任務に就(つ)いていたが、戦況は劣勢で応援の兵隊や弾薬、食糧、衣服などが既に届かなくなっていた。

米軍の攻撃が日増しに激しくなり1トン爆弾が次々と上空から投下され、地面に着弾すると耳をつんざく炸裂音(さくれつおん)と同時に爆風で土砂が吹っ飛び、大きな穴があちこちに空いて造成中の滑走路は跡形もなく破壊された。さらにごう音とともに飛来した百機を越す戦闘機から機銃(きじゅう)掃射(そうしゃ)の波状攻撃に狙われた。容赦のない乱射が続いた時だった。銃撃から逃れ地面に伏せていた横の兵隊の胸に銃弾が貫通し「う～ん」と数分唸(うな)ったあと兵隊の息が途絶えた。

海岸の壕(ごう)に設営された野戦病院には多くの負傷兵が運び込まれていたが、そこでの十分な手当が受けられず、苦しみながら亡くなった戦友を父が見送ることになった。屍(しかばね)衛兵(えいへい)の任務として亡くなった戦友の焼ける煙と灰をかぶりながら一晩中歩哨(ほしょう)に立って茶毘(だび)に付したが、「その戦友たちとご遺族の事を想うと、無念で居たたまれなかった」と悔やんでいた。

勝算の目途もなく、いつ終わるとも分からないまま、若者たちは命を懸けて最前線で戦い続けた。

父たちの小隊に敗戦が知らされたのは、9月になってからであった。

敗戦後も栄養失調や負傷した戦友たちが相次いで亡くなり、生還を誓い合っていた若者たちの未来は夢とともに儚（はかな）く消えた。

出兵時66キロだった父の体重は44キロになっていた。

病院船で引き揚げることになり、石垣島を発（た）ち広島に上陸後列車で大阪に到着。梅田から阪急電車の最終電車で川西の生家に帰還したのは、敗戦の年の12月30日であった。

途中で見た広島は、原爆投下後4ヶ月余りが過ぎていたが、被爆したその焼け跡は大地が焦土（しょうど）と化し、「攻撃で破壊されたこれまでの戦場とは比べようもないやられ方で、あたり一面焼け野原、見渡してもほとんど建物は残っていなかった」とその時の惨状を昨日の事のように話していた時の父の口振（くちぶ）りが忘れられない。

「川西の方の家は残っていますか？」と梅田駅で駅員に尋ねると、「大阪、神戸は大空襲で多くの人が亡くなれば建物も消失しましたが、北摂の方は助かっているかもしれません。」と。果たして家族や生家は無事なのか気が気でなかった。逸（はや）る気持ちを抑（おさ）えきれず、川西に着くまで座席には座れなかったと振り返っていた。

瘦（や）せてボロボロの身体を引きずるようにして生家にたどりついた時は真夜中で、すでに寝ていた祖母（父の母）を枕元まで近寄ってゆすり起こした。祖母が、軍服姿の父の身体を上から下へとさすりながら「足ついているか？」と問いかけると、「はい、ついています」と父は応えた。

消防団の年末夜警にあたっていた祖父（父の父）が呼び戻され父の姿を見るなり、「沖縄の報

(しら)せばかり届いていたので、もうおまえの命はないものと思っていたのに、よう生きて還ってきた。

疲れとるやろ、2階に上がってゆっくり休んだらええ、話すことはこれから先いくらでもできるわ」と優しく言ってくれた。それっきり寝込んだ父は2年の養生生活を送ることになった。

「石垣島百機に余る戦闘機 機銃掃射に逃れしわが生命」

「星空の下戦友の屍焼きし我 無念の別れ老いてな思う」

「床に伏し長き2年も愚痴(ぐち)言わず 復員の我に世話どりの父母」

この短歌は父の晩年の遺作である。

壮絶で生々しい戦争体験を聴き取ったのは、父が亡くなる数年前であった。

父は従軍中に高熱に冒(おか)され、その後遺症で30歳頃から視力が低下しはじめ、50歳を過ぎた頃には全く見えなくなっていた。戦禍は私たちの生活に大きな影響を及ぼした。

銃弾の中を潜(くぐ)り抜け九死に一生を得た命は、戦中、戦後と激動の時代を生き抜いたが、秋冷の朝、自宅の仏間で誰にも看取られず両親の元へと旅立ち、64歳の天寿を全うした。予期しなかった突然の別れとなり、聴いておきたかったことが聴けずじまいになったことを後悔している。

軍隊仕込みの厳しさと荒々しさを持ち合わせていた父は、自身にも家族にも厳しかった。そんな父が晩年は好々爺(こうこうや)になって相好(そうごう)を崩し初孫を抱いていたが、その様子を微笑(ほほえ)ましく眺(なが)めていたのは束の間のことだった。

父とともに生きた30年間で財産として、これからの生き方に活かしていきたい。

戦争を遠い過去のことと風化させてはならない。無惨な最期を遂げた戦死者とそのご遺族の憤怒(ふんぬ)の上に今の平和がある。

人は、人を殺すために、人に殺されるために生まれてきたのではない。この世に生を受け、生まれてきてよかったと誰もが思えるように何が出来るか考え行動したい。

そして二度と戦争をしないこと。今ある平和を子や孫に繋いでいく責任が私たちにあると痛感している。この平和な時代がいつまでも続いていくことを願ってやまない。